［特別講演Ⅲ］

夢分析：「もの言う分析」から「もの言わぬ分析」へ
――「解釈」から「沈黙」へ――

秋田　　巌
京都文教大学

天才・河合隼雄（1928～2007）[1] は膨大な著作を遺した．が，夢分析の本は書かなかった．それは，河合隼雄が河合隼雄に夢分析を受けていないからである，と，今，思う．

彼は「もの言わぬ分析」を編み出した[2]．しかし，それを経験してはいない．この「技法」は，日本人でユング心理学に携わる者であれば誰もが知っている．あまりに当然のこととして，われわれの知識の一部となっているゆえ特別なことと感じない者も多かろうが，これは実に秀でた「技法」の創造なのである．

かの精神分析の創始者フロイトが1900年に『夢判断』という極めて重要な一書を世に問うたが，彼自身はその後「自由連想」に自らの臨床の重点を移していった．そして「夢」を引き継いだのが，ユングである．夢を重視する臨床家は少なくないが，夢分析研究の歴史において最も重要な人物を一人挙げよと言われれば，ユングに極まろう．実はそのユングも「夢分析」とタイトリングされた本は一冊も書いていない．彼もまた，河合隼雄の分析を受けていない．それゆえ，書けなかった，と，私は妄想する．

ユングをはじめ，西洋の分析家は「解釈」を重視する．これでもかというほど言語化する．その分析を受けた河合隼雄が「もの言わぬ分析」を創見した．これがどれだけ容易ならぬことなのかを知ってほしい．ここにこそ，夢分析の奥義がある．日本人にとってはもとより，西洋の夢分析の在り方も河合の影響をもっと受けてしかるべきであると強く思う．

スイスを中心に西洋において半世紀にわたり培われてきた「解釈を中心とする夢分析」を河合はチューリッヒ・ユング研究所にて経験し（1962～1965），それは河合の個性化に大きく寄与した．「もの言う分析」が河合の資質を大きく開花させたにもかかわらず，帰国後，彼は「もの言わぬ分析」を試行し始めた．なぜ，河合が「もの言わぬ」こと（沈黙）に重点を置き始めたのか．

私は河合の「もの言わぬ分析」を二年半にわたって経験した（1991～1993）のち，チューリッヒ・ユング研究所において「もの言う分析」も受けた（1993～1996）．それゆえ，両者の在り方を相対化できる．

日本にはさまざまな「道」がある．茶道・華道など，まさに静寂無くしては成り立たない．日本発祥の武道である剣道や柔道においては，掛け声等発せられ，試合中，静寂の支配はないが，試合前後の佇まい，「場」に対する静かなる敬意，それら表現のなされ方を見ると，夢分析が日本において「道」にまで至るためには，夢分析もまた静寂あるいは沈黙を不可欠な要素とするべきではないだろうか．

1）日本人として初めてスイスのユング研究所（1948年設立）より，ユング派分析家の資格を与えられ，1965年に帰国．その後，日本における臨床心理学の基礎を築き，晩年には文化庁長官も務めた．
2）年次は特定できないが，帰国後比較的早期に「もの言わぬ分析」へと移行していったと思われる．